

蟹工船

小林多喜二



蟹工船



小林多喜二

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進 編 日本の文学 50

蟹工船

著 者 小林多喜二

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和六十年二月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森蒔人

東京都新宿区新宿二一十九一十三

電話（〇三）三五四一七〇三二（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二一十九一十三

電話（〇三）三五六一六二二一（代）

製 作 東京連合印刷株式会社

印刷 大日本法令印刷株式会社

目次

蟹工船

1

一九二八年三月一五日

189

注

プティブル・インテリゲンツィアの問題
久保田正文

341 334

蟹 工 船

「おい地獄さ行くんだで！」

二人はデツキの手すりに寄りかゝって、蝸牛が背のびをしたように延びて、海を抱え込んでいる函館の街を見ていた。——漁夫は指元まで吸いつくした煙草を唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたように色々にひっくりかえって、高い船腹をすれ／＼に落ちて行つた。彼は身体一杯酒臭かった。

赤い太鼓腹を幅広く浮かばしている汽船や、積荷最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてぶもいるように、思いッ切り片側に傾いているのや、黄色

い、太い煙突、大きな鈴のようなウイ、南京虫のように船と船の間をせわしく縫っているランチ、寒々とざわめいている油煙やパン屑や腐った果物の浮いている何か特別な織物のような……波風の工合で煙が波とすれ／＼になびいて、ムツとする石炭の匂いを送った。ウインチのガラガラという音が、時々波を伝って直接に響いてきた。

この蟹工船博光丸のすぐ手前に、ペンキの剥げた帆船が、へさぎの牛の鼻穴のようなところから、錨の鎖を下していた。甲板を、マドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のように、行ったり来たりしているのが見えた。ロシアの船らしかった。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視船だった。

「俺らもう一文も無え。——糞。こら。」

そう云って、身体をずらして寄こした。そしてもう一人の漁夫の手を握って、

自分の腰のところへ持って行つた。袴天はんとんの下のコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小さい箱らしかった。

一人は黙つて、その漁夫の顔をみた。

「ヒヒヒヒ……」と笑つて、「花札はなよ。」と云つた。

ボート・デッキで、「將軍」のような恰好かつこうをした船長が、ブラ／＼しながら煙草をのんでいる。はき出す煙が鼻先からすぐ急角度に折れて、ちぎれ飛んだ。底に木を打つた草履ぞうりをひきずつて、食物バケツをさげた船員が急がしく「おもて」の船室を出入でいりした。——用意はすっかり出来て、もう出るにいゝばかりになつていた。

雑夫ざっふのいるハッチを上から覗のぞきこむと、薄暗い船底の棚に、巢から顔だけピヨ／＼出す鳥のように、騒ぎ廻まわっているのが見えた。皆十四五の少年ばかりだった。

「お前は何処だ。」

「××町。」みんな同じだった。函館の貧民窟の子供ばかりだった。そういうのは、それだけで一かたまりをなしていた。

「あっちの棚は？」

「南部」

「それは？」

「秋田」

それ等は各々棚をちがえていた。

「秋田の何処だ。」

膿のような鼻をたらした、眼のふちがあかべをしたようにたぐれているのが、
「北秋田だんし。」と云った。

「百姓か？」

「そんだし。」

空氣がムンとして、何か果物でも腐ったすっぱい臭氣がしていた。漬物を何十樽も蔵つてある室がすぐ隣りだったので、「糞」のような臭いも交つていた。「こんだ親父抱いて寝てやるど。」——漁夫がベラ／＼笑った。

薄暗い隅の方で、袷天を着、股引をはいた、風呂敷を三角にかぶった女出面らしい母親が、林檎の皮をむいて、棚に腹ん這いになっている子供に食わしてやっていた。子供の食うのを見ながら、自分では剥いたぐる／＼の輪になった皮を食っている。何かしゃべったり、子供のそばの小さい風呂敷包みを何度も解いたり、直してやっていた。そういうのが七、八人もいた。誰も送って来てくれるものゝいない内地から来た子供達は、時々そっちの方をぬすみ見るように、見ていた。

髪や身体がセメントの粉まみれになっている女が、キャラメルの箱から二粒

位ずつ、その附近の子供達に分けてやりながら、

「うちの健吉と仲よく働いてやってけれよ、な。」と云っていた、木の根のよ
うに不恰好に大きいザラ／＼した手だった。

子供に鼻をかんでやっているのや、手拭で顔をふいてやっているのや、ボソ
／＼何か云っているのや、あった。

「お前さんどこの子供は、身体はえゝべものな。」

母親同志だった。

「ん、まあ。」

「俺どこのア、とても弱いんだ。どうすべかッて思うんだども、何んしろ
……。」

「それア何処でも、ね。」

——二人の漁夫がハッチから甲板へ顔を出すと、ホツとした。不気嫌に、急

にだまり合つたまゝ雑夫の穴より、もつと船首の、梯形の自分達の「巢」に帰った。錨を上げたり、下したりする度に、コンクリート・ミキサの中に投げ込まれたように、皆は跳ね上り、ぶつかり合わなければならなかった。

薄暗い中で、漁夫は豚のようにゴロ／＼していた。それに豚小屋そっくりの、胸がすぐゲエと来そうな臭いがしていた。

「臭せえ。臭せえ。」

「そよ、俺だちだもの。えゝ加減、こつたら腐りかけた臭いでもすべよ。」

赤い臼のような頭をした漁夫が、一升瓶そのまゝで、酒を端のかけた茶碗に注いで、鰻をムシャ／＼やりながら飲んでいた。その横に仰向けにひっくり返って、林檎を食いながら、表紙のボロ／＼した講談雑誌を見ているのがいた。

四人輪になって飲んでいたのに、まだ飲み足りなかった一人が割り込んで行った。

「……んだべよ。四ヶ月も海の上だ。もう、これんかやれねべと思って……。」「頑丈な身体をしたのが、そう云って、厚い下唇を時々癖のように嘗めながら眼を細めた。

「んで、財布これさ。」

干柿のようなべったりした薄い褄口を眼の高さに振ってみせた。

「あの白首、身体こつたらに小せえくせに、とても上手えがったどオ！」

「オイ、止せ、止せ！」

「えゝ、えゝ、やれく。」

相手はへゝゝゝと笑った。

「見れ、ほら、感心なもんだ。ん？」酔った眼を丁度向い側の棚の下にすえて、顎で、「ん！」と一人が云った。

漁夫がその女房に金を渡しているところだった。

「見れ、見れ、なア！」

小さい箱の上に、皺くちやになった札や銀貨を並べて、二人でそれを数えていた。男は小さい手帖てちように鉛筆をなめなめ、何か書いていた。

「見れ。ん！」

「俺にだって嬬かかあや子供はいるんだで。」白首ごけのことを話した漁夫が急に怒ったように云った。

そこから少し離れた棚に、宿醉よつかよの青ぶくれにムクんだ顔をした、頭の前だけを長くした若い漁夫が、

「俺おらアもう今度こそア船さ来ねえッて思ってたんだけれどもな。」と大声で云っていた。

「周旋屋しゆうせんやに引っ張り廻まわされて、文無しになってよ。又——、長げえことくたばるめに合わされるんだ。」

こっちに背を見せている同じ処ところから来ているらしい男が、それに何かヒソ／＼云っていた。

ハッチの降口おりぐちに始め鎌足かまあしを見せて、ゴロゴロする大きな昔風の信玄袋しんげんぶくろを担った男が、梯子はしごを下りてきた。床に立ってキョロ／＼見廻わしていたが、空いているのを見付けると、棚あがに上ってきた。

「今日は。」と云って、横の男に頭を下げた。顔が何かで染そまったように、油じみて黒かった。「仲間もれさ入れて貰えます。」

後で分ったことだが、この男は、船へ来るすぐ前まで夕張炭ゆうばりたんこう鉋こに七年も坑夫をしていた。それが此この前のガス爆発で、危あやうく死に損そこねてから——前に何度かあった事だが——フィと坑夫が恐ろしくなり鉋山やまを下りてしまった。爆発の時、彼は同じ坑内にトロッコを押して働いていた。トロッコに一杯石炭を積んで、他の人の受持場まで押して行った時だった。彼は百のマグネシウムを瞬間眼めの

前でたかれたと思った。それと、そして1500秒もちがわず、自分の身体が紙ッ片きれのように何処かへ飛び上ったと思った。何台というトロッコがガスの圧力で、眼の前を空からのマツチ箱よりも軽くフツ飛んで行つた。それッ切り分らなかつた。どの位経たつたか、自分のうなつた声で眼が開いた。監督や工夫が爆発が他へ及ばないように、坑道に壁を作っていた。彼はその時壁の後うしろから、助ければ助けることの出来る炭坑夫の一度聞いたら心に縫い込まれでもするように、決して忘れることの出来ない、救いを求める声を「ハッキリ」聞いた。——彼は急に立ち上ると、気が狂つたように、

「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこんで、叫び出した。(彼は前の時は、自分でその壁を作ったことがあつた。そのときは何なんでもなかつたのだった
が。)

「馬鹿野郎ばかやろう！ こゝさ火でも移ってみろ、大損だ。」